

## ■平成 27 年度 第 1 回 静岡市歴史文化施設建設検討委員会

- 1 日時 平成 27 年 5 月 22 日（金）9 時 30 分から
- 2 会場 静岡市役所静岡庁舎 本館 3 階 議会特別会議室
- 3 出席者 [委 員] 熱川裕、今村直樹、櫻井典子、杉澤恒、杉山朋子、谷直樹、  
中村羊一郎、松川満嘉、望月敬剛、森田みか  
[事務局] 市長、観光交流文化局長、観光交流文化局次長  
歴史文化課：丸岡課長、岩田課長補佐、花村副主幹、稲森主査
- 4 傍聴者 2 名
- 5 議事 (1) 検討委員会の目的、スケジュール、今までの経緯  
(2) ビジターセンター機能について

### 6 会議内容

#### (1) 開会

#### (2) 市長あいさつ

先月、経済局から独立をして、観光交流文化局という新しい局が発足しました。ここは、静岡市の第 3 次総合計画、次の 8 年間のまちづくりの計画を推進していく 1 つの要の局として、新しくスタートしたものであります。

観光・交流・文化というキーワードの中で、2 つの役割があります。1 つは、市民がこのまちに住むことに対して誇りを持つ、その下支えをしていきます。2 つ目は地域経済の活性化に貢献をしていきます。このまちに人が集まる仕組みをつくる中で、地域の活性化に貢献していきます。この 2 つのミッションを持って発足しました。

お手元に 3 次総の冊子をご用意いたしましたので、またお目通しをいただきたいと思えます。

ないものねだりではなくて、あるもの探しをしていくという考え方で、静岡にスカイツ

リーがないから、カジノがないからここへ持ってこようという発想ではなくて、ここに古くからあるものを探して、磨き上げ、それを魅力にして、人を集めていこうという考え方で、この第 3 次総合計画を作り上げています。

そういう観点から目を凝らして見ると、たくさんの地域資源があります。そんな静岡市の長所を最大限に伸ばして、地域の活性化をしていこうということも、この第 3 次総合計画の考え方の基本になります。

その 2 つのキーワードはというと、健康長寿と、歴史文化です。この恵まれた自然環境を活かして、ここに住むと世界で一番長生きができるぞという健康長寿都市をつくるというビジョンです。もう 1 つは、ここに弥生時代の登呂遺跡の水田跡がありましたが、人々の営みが延々と続いていくという歴史文化のシグナル、このところをきちんとアピールをすることによって、先ほど申し上げたようなビジョンをこなしていく。2 つの都市ビジョンを追求していこうという考え方が基本であります。

歴史文化の観点で言いますと、今年は、ご存じのとおり徳川家康公の四百年の記念の年でありますけれども、桜の季節に毎年風物詩として開かれる静岡まつりのグレードアップをしました。日本の祭と称して、京都の葵祭斎王代と、福岡博多の祇園山笠を招聘しました。最初は来てくれないだろうと、駄目元で交渉したのですが、来てくれたのです。2 つの祭とも、門外不出の祭です。何百年の伝統を持っていますので、斎王代を見なければ京都に会い、山笠を見れば博多へ来いというプライドが強かったのでございます。それを、職員が一生懸命交渉してくれて、来てくれるようになりました。国内では初めて、静岡まで出張して、祭を披露してくれました。

そのよすがというのは、葵祭の斎王が来てくださったのは、家康公と 400 年前のえにしによってこの祭ができたという実存観、家康公に対する敬意ですし、博多山笠が来てくれたのも、800 年前の静岡市出身の高僧、聖一国師さんが博多で疫病を何とかしたいと言って山笠を始めたところから、聖一国師さんに対する崇敬の念から里帰りをさせようということでもあります。

やはり私たちが意識している以上に、先達の素晴らしさに守られ、その威力を目の当たりにしたわけですが、残念ながら、当の静岡市民がそれをあまり感じておりません。大局的に歴史を見るとこういうことなのですけれども、明治維新以来近代化の中にあつた江戸時代というものを否定したような、あそこは封建的な時代だ、身分制度が徒弟化した時代だと、教科書では習ってまいりました。

静岡という名前も、昔は駿河府中だったわけですがけれども、この 150 年間は、歴史的な風情をなくすようなまちづくりをせざるを得なかったところがあります。それを取り戻しました。

歴史文化の都市を目指す 3 次総でうたいますと、市民の中でも「京都に勝てっこないじゃない」「金沢に比べれば貧弱だよ」というような話が出るそうです。これも違う、実はあるということです。そういう市民の誇りを取り戻して、そういうものに対して求心力を付けていくという大きな志の下で、この 3 次総があります。

その目玉となるのが、13 ページ、14 ページです。ここだけカラーコピーをさせていたしましたが、ここにある重点プロジェクトになります。輝かしい歴史も活かさなければもったいないというふうにカラーコピーをつくってありますけれども、その重点政策の 01 として、静岡の歴史的な名所の核（ランドマーク）づくりということで、この駿府城公園地区を再整備していこうという流れの 3 点セットの中の 1 つが、この歴史文化施設の整備という位置付けであります。

そういう状態で、多くの報道関係者にも詰めかけていただいているのは、その議論が、このメンバーでこれからスタートをするということでもあります。

静岡市民がここへ来ると誇りになって、このまちに生まれて育って良かったなと思えるような施設、そして、外からここにいらっしゃっている方々に対するビジターセンターの役割として、素晴らしい静岡の歴史文化を紹介します。また集客ということに意識して、ここへ来るとわくわくする、そういう観光交流の面でも貢献できる施設ということです。この 2 つを両立させるような、歴史文化の拠点をつくっていこうという志があると思っていただければと思います。

5 分間で説明すると早足になってしまいましたが、きょうは 10 時から総合教育会議が、また同じように本当に重要な会議が続くということで、その前に中座をしなければいけないということですので、冒頭の 5 分間だけ、市長の思いをまず委員の皆さんにお伝えをして、あとは託そうと思っております。どうか、将来、ここに歴史文化の拠点が、素晴らしくたくさんの方々でにぎわう、そんな姿を描きながら、この議論に私も参画をしていきたいと思っておりますし、このような機会を設定させていただきました。

どうぞ、よろしく願いいたします。

(拍手)

私が最初にあいさつをさせていただきましたけれども、最初は 20 分市長がしゃべれと

いうことであつたのです。そうすると、皆さん方のことが分からないですから、皆さん方の自己紹介で、理解をさせていただいてから、中座をさせていただこうということで、こんなふうにさせていただきました。残された時間を、ぜひよろしく願いいたします。

### (3) 委員紹介 (自己紹介)

○熱川：今、市長のお話を聞いて、ほとんど思いは一緒だなということで、非常に楽しみにしている次第です。教育の面と、観光の拠点にしたいということで、観光であると常にいわれているのですが、JR 静岡駅からの導入部分の地域づくりというか、案内も含めて、そういうものをきちんとしていきたいと思います。ぜひセノバから、基本的には駿府城公園のゲートウェイとして整備してほしいと思います。

内堀の周辺は、学校、官庁街ですけれども、そこも歴史のまちの風情を感じるような修景に整えていってほしいですし、その修景を目指してほしいと思います。

周辺は商店街ですので、商店街の連携も考えていただきたいと思います。

今、商工会議所は静岡市さんと一緒に徳川みらい学会をやらせていただいていますけれども、これができたときは、ぜひ徳川みらい学会の拠点として活用させていただきたいと思います。ボランティアを育てるという意味でも、子どもみらい学会をつくっていききたいと思っていますので、ちょうどいい方向性を持てるのではないかと思います。

徳川四百年で、ずいぶんいろいろなところと連携ができました。特に徳川の宗家とは深いご縁ができました。これからまた一緒に話をさせていただきますけれども、この関係を崩さないでいきたいと思っています。できれば、ご宗家に名誉館長をやっていただきたいなと思います。記念財団とも密接な連携をすることによって、日光東照宮との連携にしても、久能山の東照宮とも、江戸博とも、あらゆるところと連携ができて、企画ができやすいのかなと思います。

静岡の駅前に科学館がありますけれども、科学館では、展示物が陳腐化しないように企画展ができるスペースを非常に多く設けて、大成功して、たぶん企画展のおかげで倍ぐらいの 30 万人ぐらいが来ています。そういう企画のできるスペースも考慮しながらつくっていただきたいと思います。

○今村：静岡大学の今村と申します。先ほどの市長の熱いお話に大変感激いたしました。

私は、外から静岡大学に 4 年前に着任いたしまして、外から来た人間としても、非常に豊かな歴史文化を持っている地域だということを痛感しております。その際に、歴史文化

を大切にする市民や、地域の大学人にとって、今回の施設は悲願であったと聞いております。私は、そこに積極的に立ち入る大学人としてぜひ貢献したいと考えているのですが、その際に、私どもに求められているのは、調査研究はもちろんだと思うのですが、人材育成を、歴史文化施設と協働しながら進めたいと考えております。

私どもにとって人材育成は、大学が一番重要視するべきところだと思うのですが、今後新しい静岡の歴史文化をつかっていく人材や、観光資源を活かしていく人材を、新しい施設では協働してつっていきたいと考えております。微力ながら力を尽くさせていただきたいと思っております。

○櫻井：櫻井典子と申します。私は、数年前まで、消費者協会というところで消費者問題を扱ってきました。消費者問題は衣食住と多岐にわたりますけれども、結局は、その場その場で正しい選択をして、賢い消費者になろうと考えてやってきました。

歴史を考えるにしても、そのときそのときにいろいろな人々が、暮らしの中で迷いながらもいろいろな選択をしてきた結果だろうと思っております。そんなことを、博物館に来て、その思いを巡らせることができるような、歴史学者の磯田道史さんが『武士の家計簿』のあとがきの中で、「歴史を学ぶことはキャッチボールをすることだ」といっていますけれども、そんなことができる施設ができるといいなと思っております。

青葉小学校の跡地のような非常にいい場所に、財政困難な折にお金をかけてなぜこんなものをつくるのかみたいな声もあるにはあるのです。でも、それをあえてここにつくることによって、ほかの地域にも人々が行くような情報発信基地、他の博物館やいろいろな施設とのコミュニケーションを図りながら、そちらにも誘えるような場所であってほしいと思っております。

○杉澤：私は、静鉄観光サービスの杉澤と申します。よろしく申し上げます。

私は、旅行会社が通常行っているような静岡から外に行くツアーだけではなく、日本人、海外問わず、インバウンド、そして個人旅行に取り組んでおります。

そのツアーやプランの作成で重要となりますのが、お客さま目線に立つことです。どうしたらお客さまにここに来てもらえるか、行きたいという行動に至るのかです。それはさまざまな施設とも話し合いながら、ターゲットを明確化しまして、お客さまの目線で作成することが重要であると考えております。

私としましては、この旅行会社としての経験を、静岡市に来ていただくためにこういった施設にすればいいのか、そういったことを考えていきたいと考えています。

また、この文化施設を中心としまして、静岡市に数多くある観光資源とどういった連携をして、点ではなく面でお客さまにアピールしていくか、そういった観点で見たいと考えています。

また、私も静鉄グループの一員でありまして、静岡を元気にすることが静鉄グループとしての大きな使命だと捉えています。グループとしても、この事業に対して、どういったことがやれるかということも考えてまいりたいと思います。

そういった意味でも、ぜひともこのビジターセンターを含めた文化施設を魅力的にしまして、周辺の活性化、ひいては静岡の活性化に微力ながら参加させていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

○杉山：静岡新聞静岡放送事業部の杉山と申します。

私が最初にこのお話をもらったときに思ったのは、静岡に行くのなら絶対に行っておいたほうが良いと思われるような名所になってほしいと思いました。当社が持っている駿府博物館が、今は移転したのですけれども、駅前にあったときに、「駿府博物館へ行くとなんか静岡のことが分かるのですか」とか、県外の人からの問い合わせもしょっちゅう入っているのを聞いていましたので、そのあたりも気になりながら過ごしてきましたので、そんな名所になってくれたらいいなと思っています。

私は、静岡新聞静岡放送の事業部に 12、13 年いるのですけれども、ずっと県内の AMB 静岡支部、浜松支部とか、県内の要所要所の美術館との展覧会を年に 1 本ずつ、十何年間一緒に企画運営みたいなことをしてきました。歴史と文化を熱く語れというところちょっと苦手かもしれないのですけれども、メディア側としてとか、この立場として館にはどういうふうであってほしいとか、館がどういうふうにしていってもらったらメディアが飛び付くとか、そういう視点ではお役に立てるのではないかなと思って、きょうのこの場に来させてもらいました。

せっかくこんな貴重な機会をいただきましたので、少しでもお力になればと思っています。皆さんのお話を伺いながら、勉強させていただきたいと思っています。よろしく願いします。

○谷：谷と申します。私は大阪からになりますけれども、今、大阪市立住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）の館長をしています。私はもともと建築の歴史を研究してまして、久能山東照宮を実際に設計施工した中井大和守という人物の研究が、私の本来の研究です。

これまで、静岡というのは大体新幹線で素通りでしたが、久能山東照宮が国宝になりまして、ここで記念のシンポジウムがあったときに、初めて静岡に来ました。本当に静岡で降りることがなかったのですけれども、それから何かいろいろなしがらみができまして、中村先生とも関係ができて、博物館まで少しお手伝いできることになったのです。

私は大阪で博物館をつくりまして、「つくったら館長をしろ」と言われて館長をやっているのですけれども、私のところの館のことを少しご紹介しながら、静岡に何が役に立つのかということところを 4 つほどお話ししたいと思います。

1 つは、博物館は長寿命の施設です。行政はつくったら終わりと考えるのですけれども、つくったら終わりではなくて、つくってからが勝負です。私の館は、2001 年にできました。そのときの入館者は 15 万人です。一昨年度は 26 万人で、昨年度は 35 万人です。あまり右肩上がりですと、いろいろ変な期待をされてしまうので困るのですが、集客施設としてきちんとやれているということです。35 万人のうちの 12 万人が外国人です。だから、国際観光集客でも非常に意味があります。

それから、15 年前に開館したときには資料はゼロでした。今は大体 1 万点ありまして、そのうちの 5195 点が国の重要文化財です。博物館は資料を持たないと駄目なのです。そうしないと借物館で、借りるばかりで貸すものがないのです。そのへんのことも考えていく必要があります。

2 番目に、博物館はまちづくりに資する施設なのです。博物館は、ブラックボックスみたいに情報を発信しないところだと思われがちなのですけれども、これだけの人数が来ますと、まちづくりの 1 つとして、まちに対してかなり動き出します。

例えば、市民が来ます。それから、全国から来ます。今、申し上げたように外国人も来ます。そういう人たちが館の中で交流をします。私どものボランティアは 170 人ぐらいいて、そのボランティアが案内してくれます。そういう資格をつくってしまして、単に、市や、館の職員ばかりが館を運営しているわけではなく、ボランティアさんの力がかなり大きいです。大阪の人は、大阪の言葉で「いちびり」と言うのですけれども、面白がっていろいろなことをする人が多いです。そういう人がボランティアで支える状態です。

3 番目は、「博物館は金食い虫や」とよく言われるのですけれども、経済波及効果がないのかということで、大阪市立大学の経済学部の方に顧問になってもらって、いろいろ計算しました。これは、資料としてきょうは持ってきていませんけれども、結果だけ言いますと、昨年度は 35 万人来ますと、市内の経済波及効果が 28 億 7000 万円です。外国人は

そこからまた国内を回りますので、日本国内で計算しますと、48 億 7000 万円という経済波及効果を、私の館が出しました。これは 1 つの試算です。そういうことも館としては大事なことで、そういう数字は一応知っておくのは大事だと思います。

4 番目は、なぜそんなことができるのかということです。博物館をつくる前に、私は 2001 年の 10 年前から博物館づくりにかかわっています。ですから、既に 25 年博物館にかかわっています。博物館にどっぷり漬かるというか、博物館を最初からちゃんと計画して、運営をしていく人物が必ず必要です。

それで一番重要なのは学芸員です。私どもの館は、開館前に学芸員を 3 名配置しました。つまり、そういう人が博物館を設計したり、資料を収集するということです。博物館でよくあるのは、できてから学芸員を雇うことがよくあるのですが、それではとてもできません。博物館をつくるためには、その前から人をちゃんと配置して、博物館の責任を持たせることが大事です。

これは、館長も含めて、館の運営をきちんとやるのが大事かと思います。そういうことをしていく中で、先ほど市長がおっしゃったように、歴史文化を磨くということは、日本はこれしかないのです。

昨日、テレビで、日本の国民総生産のうちの観光関係が 2% でした。世界の平均は 8% です。だから、日本も 8% で（今より）もっと上になる可能性があります。そういう意味では、ぼやっとして分かりにくいところがあるのですが、博物館とか、観光というのは、非常に経済波及があるのだと思います。

○中村：中村でございます。生まれも育ちも静岡でございますので、地域の歴史文化に対しては、最初からいろいろな関心があります。これを活かさなければもったいないというのは、先ほどの市長のお話のとおりだと思っております。

だいぶ前から博物館構想はありまして、いつも構想検討を繰り返しまして、結論が出ないままだったらと来ました。一体どうなのだろうと思って非常に心配していたのですが、いよいよここで本格的に、これに市が取り組んでくださるということで、一市民として大変嬉しく思っております。

今、谷委員のお話を聞いて思ったのですけれども、博物館の持っているパワー、底力が、地域の活性化、大きな意味で言えば日本全体にとっても大変重要な役割を果たすに違いありません。

このたび発表されました第 3 次総合計画において、静岡市は健康長寿のまち、歴史文化



のまちということを大きく掲げたのですが、健康長寿のまちは誰もが願うことであり、行政としてやらねばいけないことです。ですから、次に出てきました歴史文化のまちづくりということが、実は健康長寿のまちを実現していくうえでの最も重要な施策であり、キーポイントだと僕は解釈いたしました。

そうなれば、この博物館の役割、存在意味が、いわゆる「お客さんいらっしゃい」だけの部分だけではなくて、教育、健康、あるいは防災、もちろん観光、地域発展、あらゆる面における拠点としての意味を果たさなければ、せっかくつくる意味がないでしょう。

そうした意味で、総合的な位置付けを、この委員会の中で皆さんのご意見を聞かせていただきながら、私も考え、静岡人の誇りをさらに高めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

————— 市長退席 —————

○松川：市民公募の松川満嘉と申します。私は 3 月まで中学校の国語の教師として教員生活を送っておりました。37 年間 13 校で教員生活を送って、今は、英和女学院中学校のほうに縁があって、時間講師として務めさせていただいています。

なぜこの公募に応募したかということなのですけれども、先ほどから、特に杉山委員のほうから話がありましたけれども、市民としては待望久しい施設なのです。なぜそんなに待ち遠しかったかというと、静岡はすごいのですが、静岡を知るためにここへ行けば分かるよという施設がないのです。

この前、ああなるほどなと思ったことがありました。県立の博物館がない県がまだ 2 つあります。静岡に、ふじのくに地球環境史ミュージアムができますと、博物館がない県が 1 つ残ります。最後に残った 2 つの県は、なんと静岡と愛知なのです。われわれは、どっぷり文化財に漬かってしまっているものですから、継承しようという意識がたぶんないのではないのでしょうか。愛知もそうです。ものすごい文化財があります。だから、逆にあり過ぎて、それを大事に守って、継承していかなければならないという意識が、残念ながら静岡県民と愛知県民には薄いのかなと思います。最後の 2 県が静岡と愛知だということが、非常に自分としては象徴的に思われました。

自分として、やりたいことが 2 つあります。1 つは、自分は中学生の相手を主にしてきました。中高生を相手にしてきたものですから、中高生にも分かりやすくインパクトがある施設にしたいということがあります。

もう 1 つは、自分はたくさんの学校を回りました。例えば、一番思い出に残っているの

は、興津とか、羽鳥です。羽鳥地区は、教員として赴任する前は、大変道路事情が悪くて、雨になるととんでもない状況になって、ちょっと住むには嫌だという意識しかなかったです。ところが、羽鳥地区は文化財がすごいのです。法隆寺にも匹敵するような学問寺で、建穂寺があります。今川家官家の増善寺があって、見性寺があって素晴らしいです。

素晴らしいものがあるって、そこに入っていくと、地域に守られたすごいものがあるということ、自分がそこに行って初めて知ったのです。

興津へ行って、清見寺が朝鮮通信使とか、自分は初めて知ったのです。羽鳥中学校に赴任して初めて、羽鳥はこんなすごいところだと分かりました。興津中学に赴任して初めて、興津というのは、こんなにすごいところなのだと分かりました。

そういうことが、この博物館で分かって、集積でき、地域を結んでいきます。そこで、おらの中学校はこんなにすごいんだ、ではというかたちで、また地域に持ち帰る、そんな施設になればいいな、2つのことはぜひやっていきたいと思っているところです。

よろしくをお願いします。

○望月：城内中学校校長の望月と申します。私は、義務教育の代表で来させていただいているのかなと思いますので、児童、生徒の子どもたちが、どのように育っていくのかということ、大きな発言をしなければいけないと思っております。

静岡市の3次総と併せて、教育委員会では、第2期教育振興基本計画をつくりまして、ことしの4月1日から運用されています。4つの柱があるのですが、それ以外に今、課題として取り組まなければいけない中に、シチズンシップ教育が静岡市で掲げられています。

シチズンシップ教育では、私は4つ子どもたちに教育していかなくてはいけないと思っております。1つが主権者教育です。主権者教育は、政治や行政に対して関心を持つことです。簡単にいいますと、選挙に行きなさいというような教育になろうかと思うのですが、今、国会で18歳から選挙権をとということで、国会を通れば、その次の総選挙等から運用されるということですので、高校生はすぐですが、中学生にとっても大きなこととなります。

2つ目としては、公共モラルの教育です。公共的な部分のモラルが非常に劣ってきていることもありますので、これも1つシチズンシップなのだろうなと思っております。

もう1つは、活動開発教育です。これは、今、社会の課題というものが、なかなか二者択一の答えが出ない時代になっていますので、それぞれが折り合いを付けながら協働と協

力をしていいものを作り上げていく、こういう発想の上に立つことができるような子どもたちを育てたいということです。

最後に、先ほどからも出ているのですけれども、ボランティア教育です。これをやって、子どもたちが自然とボランティアに携わっていける、そういう文化を育てていかなければいけません。

私は、シチズンシップ教育をこの 4 つの観点から見えています。ただ、これを単独でやろうとしますと、なかなか難しいのです。子どもたちに、その地域であるとか、私たちは静岡市なののですけれども、静岡市を愛する気持ちがなければこの 4 つは何も進まないです。政治や行政に感心を持つとか、ボランティアとか、公共モラルも全てなののですけれども、地域を好きになりますから、そこにかかわろうとする子どもたちが育つと思っています。

そういう意味で、この歴史文化の話があったときに、これは使えるなと思いました。歴史文化の象徴として、登呂遺跡がございます。静岡市の子どもは、必ず登呂遺跡に行きます。教科書にも出ています。資料集にも出てきます。そこで静岡市の歴史の勉強は終わってしまうのです。その後は、どうしても受験勉強に行って、一般的なものに入ってってしまう傾向があるのですけれども、1 つここに、今回つくるような通年の、静岡市を勉強するとか、徳川家康公とか、聖一国師さんとか、今川義元さんとか、そういう勉強をすることで、子どもたちが郷土愛を持てるようになるという期待があります。

子どもたちには、知識として身に付けてほしいのです。こういう歴史を築き上げてきた静岡市のまちを理解してほしいのです。次には、そうして得たものを伝えてほしいのです。これが、私たちが子どもに伝えていくべきことだと思います。こういう施設を、歴史文化の伝統の中で知識として理解して、他地域の人たちに伝えていく、こういうことをつなげることが郷土愛を育てていけるだろうと。これこそがシチズンシップ教育をさらに深いものにしていくなと思って、このお話があったときに、そんなことで描ければいいなと思っています。よろしく願いいたします。

○森田：森田です。よろしく願いいたします。静岡市の文化財資料館という施設がありまして、博物館がない静岡市だったものですから、その役割を請けて長年やっているのですけれども、その運営委員長をずっと長くやらせていただいています。本当に少ない予算の中で、できないものは館長さんが自分の人脈とかを使いながらやっとなら運営している状態の中から、何とか博物館をという強い思いがありました。

今までも、いろいろな検討委員会にずっと参加させていただいたのですけれども、やっ

とここまでたどり着いたということで、とてもわくわくしております。

自分の仕事としましては、地場産業のデザインをやっておりまして、家具ですとか、茶業ですとか、その物はいいのですけれども、見せ方を変えればもっと売れるのというデザインのお手伝いをするのが自分の仕事です。まちづくりと、デザインが一緒になっていくようなことができないかということで、ずっとやっているのですけれども、文化財のほうもそういうかたちでずっとかかわってまいりました。

この新しい博物館は、博物館機能だけではなくて、地域の活性化に役に立ち、いろいろなところと連動していくところが、今までにない、後発だからこそできることがあると思います。そこに期待して、進めていっていただけたらありがたいなと思っております。よろしく願いいたします。

(自己紹介終了)

#### (4) 委員長の選任

委員長 中村委員 職務代理者 熱川委員 に決定。

#### (5) 委員長あいさつ

○委員長：ご指名いただきました中村でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

先ほど、私の思いもちょっと話をさせていただきましたけれども、やはり静岡市にとって重要な施設であり、施設建設だけではなく、それをどう活用していくかというところに、巨費を投じて市がやっていくという意味での役割があるのではないかと思います。

各委員の皆さま方からは、先ほどからいろいろ具体的な思い、考え等を頂戴いたしました。ぜひ、これからの委員会の内容におきまして、そうした皆さま方の思いが具体的なかたちになっていきますように、委員会を進めていければいいのではないかと考えております。

微力でございますが、委員長にさせていただきました。皆さま方のご協力を、ぜひよろしくお願いいたします。

(拍手)

#### (6) 議事

①検討委員会の目的、スケジュール、今までの経緯

資料により、事務局から説明。

委員から、質問、意見なし。

## ②ビジターセンター機能について

○委員長：議事の（2）ビジターセンター機能について、に移ります。事務局から、説明をお願いいたします。

○事務局：最初に、基本的な考え方につきましてご説明させていただきます。資料は、3 です。ビジターセンター機能は、博物館との連携を基調とし、施設への集客向上、市内回遊の動機を高めることを目指します。

ビジターセンター機能につきましては、市内の観光の入り口になるようなものと考えております。これは、まず静岡市に訪れた観光客が必ず立ち寄るような場所であり、また、そこから近隣の浅間神社や、呉服町、七間町などの周辺商店街、さらに市内各地の観光施設や名所へ誘うような観光案内機能を備えたものです。

また、それとは逆に、市内各地の食や、物産、工芸品等が集まり、それらを紹介することで、時間のない方は、その場所へ行かなくても静岡が味わえるような機能も必要となります。さらに、博物館と連携し、研究成果を活用したり、ビジターセンターに訪れた人の知的欲求を満足させるため、博物館に足を運ぶようなことも期待できるものと考えております。このような博物館、ビジターセンターが拠点となって、地域の間で人が循環していく仕組みを考えます。

次に、参考と書かれた資料をご覧いただきたいと思います。

ビジターセンター機能のイメージは、学習性・地域性を兼ね備えた、娯楽性・集客性のある施設と考えています。この資料では、右側が娯楽性・集客性が高く、学習性・地域性が低いものです。また、左側が学習性・地域性が高く、娯楽性・集客性の低いものが描かれています。左側にあるようなものは、これまでの博物館の延長である体験スペースやミュージアムショップであり、これらは既に必須というべきものであります。また、右側にあるような、東京ディズニーリゾートなどのキャラクター重視のテーマパークや、ソラマチのような複合型商業施設など、娯楽性の高いものでもないということで、中央部分を目指すこととなっております。

中央に描かれている食処しずおかや、東海道の 2 峠 6 宿の旅今昔などは、具体的なイメージを共有するために既にある施設等を基に作成したもので、これらをつくるというもので

はございません。これはあくまでもイメージですので、これに固執せずに、ビジターセンター機能につきまして、ご議論いただきたいと思います。

○委員長：ビジターセンターの機能の考え方について、ご理解をいただけましたでしょうか。イメージを頭に描いていただいて、この後で、さらに具体的な問題を、皆さんのほうからおっしゃっていただきたいと思います。

○谷：先ほどビジターセンター機能のところで、年間集客 50 万人で、15 万人が博物館の固有の客ということで、あとの 35 万人はどういうことなのかということと、特にこの集客の内訳がよく分からないのですけれども、誰をターゲットにしているのですか。何もなしに 50 万人といわれても、静岡の人口を私は知りませんが、どうもこのイメージとかを見ていると、先ほどのお話を聞いていると、市民とか、そういう人かなと思ってしまうのです。たぶんそうではないのでしょうか。そうしたら、市民、県民、あるいは関東地方の人とか、関西の人とか、外国人とか、そういうふうな内訳を教えてください。

当然、50 万人も集めようということであれば、きょうは議論しないとおっしゃったけれども、面積を考えないと、小さな面積で 50 万人なんてオーバーフローしてしまいます。当然、面積があればお金の問題が出てきます。それは、この委員会では議論しないことになっているのですけれども、そのへんの裏付けがちゃんとあるのかどうかということをお伺いします。

○事務局：平成 24 年に、博物館機能だけでどのぐらい人が集まるかという試算を、こちらのほうでさせていただきました。その試算の中では、人口が 70 万人で、市内に宿泊される方が 150 万人という中で、年間 13 万人から 18 万人ぐらいの人たちが利用をしていただけではないかというかたちで、15 万人と試算させていただいているところであります。

今回、大きく 50 万人と打ち出した部分につきましては、特にしっかりした根拠はありません。教育的な施設ということで、学校教育で来られる方につきましては、先ほどの 15 万人の中に入っておりますので、それ以外に市内外から人を呼び込みたいと考えております。

プラス 35 万人というのは非常に高いハードルであることは認識しております。ただ、館の中に入るというよりも、館の前を通過される方が、できれば 50 万人というかたちのものを目指しております。というのは、この駿府城エリア全体の集客を図りたいのです。ですから、この館に立ち寄ってそのまま駅に向かうのではなくて、駿府城公園、そして、

できれば浅間神社まで回遊できるかたちの中で、それだけの人数を集めたいと考えております。

従いまして今、150 万人という宿泊者数、観光交流全体の数字を上げていきたいと考えております。15 万人プラスアルファの、アルファを 35 万人に近づけるようなビジターセンター機能を、少しでも人が集まる具体的な方策をご議論いただきたいと思いますと考えております。

○松川：すみません。自分の中での整理もしたいのですけれど、このビジターセンターというのは、博物館の本来の機能と全く関係のない中で集客施設として別個のものとして考えているのか、それとも、博物館として、薄くてもいいけれども本来の博物館の機能と少しかかわっていく中での施設として捉えていくのかということが分からないのです。

○事務局：薄くてもいいので、博物館に関連した部分としての集客施設があればと考えております。

○熱川：今の市の美術館は展示をやっていないときでも、ミュージアムショップとカフェがあって、期待以上にたくさん来ていますよね。そういうような活用の仕方もあるということ、プラスで載せているのですか。

○事務局：それも 1 つの考え方です。後で、具体的なイメージのところにありますけれども、当然、静岡はお茶を売り出していきたいところがありますので、お茶を飲めるようなスペースとか、ミュージアムショップ的な部分は打ち出していきたいのです。ただのミュージアムショップではなくて、もうちょっと広がりのあるようなものだと思いますので、その議論をお願いしたいと思います。

○熱川：子どもたちの関係は、15 万人の中に入っていると言われましたけれど、どのぐらいの数字ですか。例えば、科学館と比べてどうか、必ず子どもたちが義務教育の間に 1 回行ってもらった数字だとか、そういう根拠はカウントされているのですか。

○事務局：そのへんにつきましては、カウントさせていただいております。市の美術館が大体 36 万人で、登呂博物館が 18 万人という数字になっております。そういう数字を重ね合わせて今、教育普及で小学校の 4 年生が必ず歴史の勉強をされるので、その数字が大体 1 学年 6000 人程度と伺っておりますので、6000 人は必ず来ます。それ以外にも、中学校で歴史を学んだ方々が来ます。その 1 万 2000 人は必ず来るところは考えた数字になっております。

○事務局：15 万人というのは、いわゆる博物館機能のみの場合のかなり頑張った状態ということ。事例として、後ろにも名前が少し書いてあると思うのですが、仙台市博物館

とか、新潟市歴史博物館とか、15 万人に達していない状況でございます。今回さらに、われわれとしてはこれだけの投資をしていくわけですから、歴史を磨き上げて、これは当たり前前の話ですけど、そこに新しい価値を加えて、どうすればより多くの人がここに来ていただけるかです。

この場所は、今は人の動線に当たっていないのです。駅から駿府城公園へ行くときに実は最短距離にあるのですが、一般の方はなかなか通っていただけません。今回、博物館のこの場所だけではなくて、駅のほうから、江川町の交差点は今年平面交差の工事をやっておりますが、あそこからセノバの前とか、セノバの前から外堀、そこから城代橋を渡って駿府城公園、今、復元されている巽櫓（たつみやぐら）があるのですが、そこへなんとか人を誘うような、いわゆる道路の歴史を感じるような、道路の整備も一緒にいろいろなところと連携して、これをやっていかなければ人は来てくれないと考えています。

静岡に来るのならもうここへ行かなければねと、先ほどお話をいただいたのですけれども、静岡の方は「静岡にはどんなところがあるのですか」と聞かれたときに、「いや、何も無いからね」というような答えが多くて、非常にがっかりしましたと。しかし、来てみると、いろいろ見どころがあるのです。

先ほど出ていたシビックプライド、郷土愛を、皆さんに静岡の歴史を学んでいただいて、自分たちのまちはこれだけ素晴らしいのだというのを対外的に、皆さん一人一人が親善大使になるような、これも教育と連携しながらやっていかなければならないと思うのですけれども、まずは市民の皆さんにそれを感じていただきたいと考えております。

15 万人と、今は 50 万人という仮の話をさせていただいたのですが、とにかくどうすれば、どういう機能を加えれば、それがいわゆる人寄せの機能がいいのか、それとも、企画的な機能がいいのかです。例えば、21 世紀美術館みたいに、建物だけで人を呼べるようなものにしたらいいのか、このへんは、専門家の皆さんの見識から、いろいろなご意見を賜りたいということでございます。言いつ放しで構いませんので、いろいろなアイデアを今日は出していただきたいと考えています。

付け加えて、三保の松原なのですけれども、昨年度、集客数が 100 万人おりました。その 100 万人の方々を、どういうふうにごここまで引っ張ってくるかということでは、今の施設には、バスの止まる場所があります。そこに、観光客の方々が必ずバスで立ち寄っていただいて、まずここを見ていただく仕組みづくりをするようなかたちを考えています。

久能山東照宮につきましても、昨年度 40 万人ほどの方々が来ています。かなりの数の



方々が静岡には観光バス等で来られています。そういう方々が必ず立ち寄るということであれば、50 万人も不可能ではないと考えているところです。

○杉山：50 万人とおっしゃって、え？と思いました。300 日で割ったら 1 日 1600 人が入らなくてはならない計算とか、15 万人といっても、300 日で割ったら 1 日 500 人入らなければなりません。

今、静岡市美術館で大原美術館展をやっていますけれども、1 日に 1000 人入らないのです。そうやって何十万人を持ってくるためには、企画はもちろんなのですが、いくらいいことをやっても、駐車場とか、動員をどうするかとか、どうやって来てもらうかということを本当に一緒にやらないと、来てもらえません。いくらいいことをやっても、「あそこへ行きたいけれど車が置けないしね」とか、「行くのが大変なんだよね」というのが先に立つと、来てもらえません。

われわれが企画をするときには、どう動線をつくるかとか、この駐車場に置いてどう周らせるかというようなことを考えるので、これはこれ、あれはあれというよりも、先ほど谷先生がおっしゃったように、一緒に全部同時進行でいかないといけないかなと思います。

例えば、われわれと一緒にやらせてもらいたいと思うときには、あそこは駐車場がないからちょっとできないというのが、先に立ってしまうと思うのです。例えば県立美術館で大型の 5 万人、6 万人を動員する企画を立てるときは、まず駐車場と、ピストンバスを考えます。観光客を呼ぶにはどうするかとか、子どもたちに見学に来てもらうためにはどうするかと考えたときに、子どもはただで何万人です。だから、ただ来てもらうだけでいいのか、お金を落としていってもらう 15 万人なのかというのも、人が来るのが目的なのか、どこでお金を落としてもらって、潤っていく人をどれぐらい見込むのかとか、そんなことを直感的に感じました。

○委員長：先ほど事務局からご説明がありましたように、前を通る人も 1 人なのです。つまり、お堀の中の駿府城公園に集まる人もひっくるめて、今まで通らなかった人がこんなに通るようになったといったような少し柔らかい発想でいかないと、自縄自縛になってどうしようもなくなってしまうという感じがいたします。

特に谷委員からご指摘があったように、ターゲットの詳細な予測や分析をしかるべきかたちで行うことによって、果たして現実にどういう方向が可能であるか、特に数字が出る場合は後で本当に自縄自縛になりますので、そうならないような方向をなんとか考えてい

かなくتهはいけないと、思いました。

○熱川：最初に谷委員から発言があったと思うのですが、商業施設や、ビジターセンターに何を入れるかの議論を今しないといけないと思いますが、その際に前提となるのは、どのようなスペース感かということです。それが分かっていないと、議論が難しいのではないかと思います。

あとは、ビジターセンターと博物館機能でフロアとかを設ける比率がどれぐらいなのかです。35 万人ということは、ビジターセンターにより人が集まるということです。実際にそれを受け入れる際に、博物館と入り口は分けると思うのですが、その際に、どのようなかたちにすればより人が入りやすくなるのかということも、施設面の問題としてあると思うのです。

あとは、その前を通ればいいということは、もちろん大賛成なのですが、人が多過ぎて、「あそこへ行ってもなかなか入れないよね」という話になるともったいないと思います。そのあたりは具体的にどのような構想があるのか、スペースの比率の割合があれば、お伺いしたいです。

○事務局：諸室構成につきましては、今後の課題というかたちで、大変申し訳ないのですが、次回までお待ちいただきたいと思います。

なお、市の美術館の展示面積は、およそ 1100 平方メートルとなっております。そういうところを勘案しながら、あそこが狭いのかどうなのかという議論にさせていただきたいと思っております。同じく、市の美術館の延床面積が 3400 平方メートルとなっております。それよりも広げる予定にはなっておりますので、このぐらいの面積があればこういうことができるというご発想で、きょうはご議論をいただくと助かります。

○望月：今の建物を新しく作り直すという発想もあるということによろしいですか。

○事務局：基本的には、今の建物を取り壊しまして、新しいものをつくることになっております。

○望月：分かりました。

仙台市と新潟市の博物館の人数が出ています。こちらのほうは、どのぐらいの床面積があって、どういう機能があるかを教えていただきたいと思います。

○事務局：面積につきまして、資料 1 の下のところをご覧ください。

仙台市の博物館は、伊達家の資料などをお持ちですし、新潟市に関しましても、日本海の交易の関係や、ロシアとの通行の関係といった歴史的な史料をお持ちですので、いわゆ

る歴史系の博物館とお考えいただいて結構です。

○森田：青葉小学校の跡地にするといったときに、もともとの面積がどうしても小さいものですから、例えば企画展をやるときに、市の美術館と連携してやって、その間を動かすことは可能なのかというお話も出たのですが、それも可能ではないかということ为前提に話が進んできた経緯があります。

外の商店街のほうにも人を流していくのと合わせて、前を通る人も合わせて 50 万人というイメージとしては、静岡の魅力的なところは中心市街地だと思うのです。駅前が活性化しているところは全国的にも珍しくて、駅からの動線をうまく使いながらここまで引っ張ってくると、間のセノバさんや、いろいろなデパートさんも含めて、全体の中でうまく 1 つのテーマの中で企画を回していくことが、静岡だったらできるのではないかというのが、イメージとしてはありました。

例えば、伝馬町商店街みたいな昔からの商店街も、歴史でまちづくりをやっているところですし、反対側の浅間神社の門前町のほうも、なかなか人手がなくて進んでいかないところもありますけれども、ポテンシャルがあるのです。そういうところも全部ひっくるめて、まちごと博物館のようなことができていくと、全体としても持っていけますし、博物館としての面積が足りない部分が補えますし、結果としては市全体、県の活性化にもつながっていくかたちになります。

私がずっと委員会とかに参加させていただいてきたここまでのイメージとしては、博物館という単独の機能のために議論をするというよりも、その周辺を全部含めた中で、人をどう動かしながら歴史に興味を持ってもらうかで、静岡というまちの面白さを、歴史というフィルターを掛けてもう 1 回見直してみて、全部が歴史になるようなイメージなのかなどと思っています。

子どもたちもカウントして 15 万人という説明がありましたけれども、何度も来てくれれば、その分いいわけです。例えば、うちの娘たちも、静岡科学館る・く・るは、用がなくても行くのです。べつに科学の勉強をしに行くわけではないのですけれども、なんとなく楽しくて行くのです。ミュージアムショップも面白いものが置いてあるとか、いろいろあって行くのです。そういうことでもいいと思うのです。

それも含めて、歴史の研究をされている方たちの研究エリアをきちんと守りながらも、楽しんでいく人たちから深い人たちまで、かかわりたいと思うときにかかわれるようないろいろな引き出しを持てることが、後発の博物館の魅力になってくるのではないかなと

思っているものですから、それも検討したらどうかと思います。

○杉澤：旅行会社としまして、団体にツアーとして提案すると仮定し、ここをコースに入れるかを単純に考えると、現時点では入れられないです。

先ほど数字を聞きましたけれども、今、静岡市に来てくださっている方が何しに来ているかという、お客さまたちが行きたいと思うのは、食と、体験です。これがキーワードになると思うのです。では、三保の松原へ行きました。日本平へ行きました。日本平で何かバイキングを食べ、匠宿で何かしらの体験をする、といったツアーが一般的になります。

お客さまが行きたいと思うところと、行って良かったと思うことは違うのです。ですので、旅行会社としては、チラシの構成などで食を前面に出しますが、実際に行って良かったなというのは歴史のほうということで、自分としては、連携が非常に大事ではないかと思っています。

このビジターセンターにそういう機能を持たせていいのかは分からないけれども、それはそれで問題のところも出てくると思うので、例えば日本平さん、あるいは匠宿、そういったところとセットで考えていく必要があります。そうなったときに問題になってくるのが、やはり駐車場だと思っています。

○櫻井：おいしい食べものがあるって、おいしいスイーツがあるって、ちょっとした面白いグッズがあるといえ、女の人たちは日常でも行くと思います。そこから博物館にどういうふうに関連させていくかというのが、大変重要だろうと思います。歴史とかに興味を持って来た人たちが、そこで学び、そこからほかの地域にも出向いていくような場所がほしいということをここでも言っていると思うのですが、今のお話を聞いて、ビジターセンターと博物館がどうもうまくかみ合わないイメージがあるものですから、ちょっと戸惑っているところです。

○委員長：ビジターセンターは、まず博物館があるという前提で、どういうふうにしようかという議論になるわけです。博物館の内容そのものについては、2 回目以降で、また具体的なお話になると思います。

次に、ビジターセンター機能の考え方として、集客と回遊という 2 つの視点を立てられていますが、これを次の議論ということで少し具体的に考えていきます。事務局から、何かイメージについてのご説明があれば、改めてお願いしたいと思います。

○事務局：まず、左側の 1 の集客創造では、どのようなものがあれば人が集まるのか、案を幾つか示させていただいております。ここでしか味わえないような高級感のあるもの

として、地元食材を使ったレストランや、駿府城公園内にある家康公お手植えのみかんを使った商品の販売など、立ち寄った人の興味を引くと考えられるものとして、高速道路のサービスエリアにあるような高級なトイレや、江戸時代、明治時代に使われてきたトイレを再現するなどが考えられます。

また、右のほうにあります回遊促進では、ここに集まった観光客を市内各所へ回遊させるためにどのようなものが必要なのかについて、幾つかの案を示したものであります。市内歴史観光・インフォメーションコーナーとして、有人カウンターによるものや、タッチパネルによるものなどが考えられます。また、市民ガイドなどによる駿府城巡りや、スマホのアプリを活用したまち歩き支援ツールの作成などが考えられます。

こちらについては、本日の会議の中心ではありませんけれども、イメージを描いていただくために、手法を示させていただいたところであります。できれば本日、より具体的にこういうものだというご意見をいただきまして、それを次回の会議までにまとめさせていただきたいと思っておりますので、活発なご議論をお願いしたいと思います。

○委員長:1つ確認でございます。委員の皆さま方がちょっとしっくりきていない部分は、今までプロジェクトの委員会がございまして、それによって博物館というイメージが大体できているし、博物館の機能としてなくてはならないものは十分指摘されているわけです。従いまして、きょう議論をしているビジターセンターなるものが、屋根は同じで、博物館という区画とは別なところに設定しようとしているのかです。

あるいは、博物館の内容にまで踏み込んだかたちで、こういうものも展示の中にどんどんぶち込んでいけばいいのではないかと、そのへんがちょっとあいまいなような気がするのですが、事務局としてお考えになっているビジターセンターは、内容が関連していることは当然なのですが、区画として別なものを、同じ建物の中に設定するというお考えなのでしょうか。

○事務局:基本的に、ビジターセンター機能につきましては、同じ建物なのですが、面積的には別で考えていきたいと思っております。

○委員長:分かりました。今のご説明を聞いたうえで、さらに具体的なかたちで、ご意見、ご提案がありましたら、ぜひお出しいただきたいと思っております。

○松川:あくまでもメインは博物館で、それに関連した何か集客できるものかと考えるのか、とにかく集客ということを中心に離して考えるのかが疑問ということです。本当に集客がメインなら、もう完全に離してしまって、ここに来て、ついでに博物館へ寄った

らどうかということになってくるなら、それも有りだなと思います。そのへんが、自分の中で整理ができていないので、お考えを。

○委員長：谷委員が館長をされている館は、両方混じったような性格を持っていらして、コスプレをして昔の町家の中を歩いて、好きなところで写真を撮るという非常に面白い仕掛けになっています。

谷委員にちょっとお尋ねしたいのですが、ビジターセンターを切り離して考えていくのか、むしろ展示の中にこれらを取り込んでしまった全く新しいスタイルの手法があり得るのかということで、何かご意見はございますでしょうか。

○谷：かなり難しいと思います。

私は、この参考資料を見ていると、どうもこれをつくられた方の意図が、集客性が高い低いとか、右の端にキャラクターを売りにしたテーマパークがあつて、ディズニーリゾートまで考えておられるのですけれども、例えば、アンパンマンミュージアムぐらいを誘致したいと考えるのがあるのです。つまり、そういうのが一角にあると、ついでに博物館を見してくれるのではないか、そう考えておられるのではないかなという感じがしたのですが、違うのですか。

○事務局：基本的に、集客性が高いと右側になるのですけれども、できればそういうようなものにならないようなかたちで、真ん中にしたいのが、うちの考え方です。

○谷：なぜ、真ん中のほうがいいのですか。

○事務局：なるべく歴史に関係付けた形にしていきたいという考え方があります。

ただ、もう 1 つ考え方がありまして、昨年度もうちで企画展とか、歴史講座をやりました。そうしますと、必ず来ていただける方は、例えば、小和田哲男先生にご講演を願いますと、大体 400 人は集まります。その 400 人の歴史が本当に好きな方々がコアになります。ですから、今、歴史文化施設をつくった場合には、そういう方々は必ず来てくれるのですけれども、それ以外の方々に来ていただけるような仕組み、例えば、先ほど松川委員が言われたとおり、来たら面白いものをやっていたから見たら良かった、そして歴史が好きになったというような部分もほしいと考えております。

ですから、ちょっと外れてしまうかもしれないのですけれども、ある程度集客性のあるものがあつて、その中で見て、歴史がすごく良かったよねという方も来ていただけるような、集客的な施設があればいいというのが、事務局の考え方です。

○谷：博物館単体で 15 万人はかなり難しいと思います。私は 4 つぐらい博物館をつくっ

ていまして、一番古い博物館では、人口が 80 万人ですが、開館時は 20 万人来ました。それがずっと下がって、大体 6、7 万人ぐらいで、今は 5 万人ぐらいをぐるぐるしているのです。それはもちろん建物の老朽化もあるかもしれないけれども、博物館はそういうものなのです。

もし安定的に 15 万人を確保しようと思ったら、しょっぱなのときには 30 万人とか、40 万人とか、爆発的に来ないとかなり難しいです。ビジターセンターと博物館が別個、あるいはビジターセンターで人を呼んでおいてついでに博物館を見せようという話ではなくて、ビジターセンターと博物館が入れ子構造というか、お互いににじみ出すようなところが、どうしても必要なのではないかと思います。

そうしないと、木に竹を接いだみたいな施設が 2 つあって、たまたま行ってみたら博物館もあったから、行って良かったと言う人がいるかもしれませんが、建物の雰囲気のものすごく大事ですから、ここでしかできない体験が何なのかというところが一番大事だと思います。

今の集客創造のイメージは、スイーツとか、レストランという話がありますけれども、これはべつに大阪でつくってもいいわけですし、東京でつくっても構いません。静岡に来て、この静岡市の中でしかできない体験は何なのかをもう少し詰めていかないといけません。それが、恐らく、静岡の風土や歴史を背負ったものになってくるはずで、東京でできるものならやめたらいいわけです。だけど、ここでしかできないものという、たぶん、静岡の歴史とかを背負ったものになってくるでしょう。それは、ある意味、歴史好きという人は別個にして、もうちょっとふわっとした人たちが行こうかなと思うものを、はっきり打ち出さないと駄目です。

僕は、先ほどの 50 万人の話で聞いたかったのは、何で集客しようとしているのかが分からなかったのです。べつに 20 万人でも構わないですが、歴史博物館ということで集客はできません。それはある種固定された人で、それだけでは、70 万人の都市で、ビジターが 150 万レベルだったら、そんなに来ないです。150 万のうちの 2 割とか 3 割を集客しようなどというのは、あまりにも楽天的過ぎると思います。

例えば、安藤忠雄につくってもらったら来るのではないかという話は考えないほうがいいです。結果的にそうなったら、それはそれで 1 つかもしれないけれども、21 世紀美術館の場合も、できる前に、前もって何年かの実験みたいなのがあって、小学生のワークショップをやるとか、周辺の喫茶店では、美術館の入館券を持っていくと何割か安くなるとか、

そういうかなりソフトの構造をつくっているわけです。

そういうことによって、周辺施設の人も、自分たちの施設だということで動機づけされるわけです。そういうことをはっきりさせていかないといけないです。

今日はちょっと発想を転換して、博物館をつくるということではなくて、集客施設をつくったときに、博物館とか、歴史とか、文化というものをどうやってはめ込んだら、集客できるかです。一応、博物館はあるのですけれども、博物館はないという想定で、博物館の機能や展示は別にして、文学や歴史で静岡に人を集めようとしたら、一体何がテーマになり得るのかを、もう少し議論したほうがいいと思います。

僕は、朝来たときに、これが終わってからどこか行こうと書いていろいろ地図を見たのですけれども、僕は建築ですから浅間神社などはあるかもしれないけれど、それ以上に魅力がないと思うのです。そのときに、恐らく、みんなは日本平へ行くとか、そちらのほうに行ってしまうのではないのでしょうか。あるいは、博物館好きの人は、教科書に出てきますから、登呂へ行くのではないのでしょうか。

べつに登呂とけんかをする必要はないけれども、それよりも魅力的なテーマが何なのか、はっきりしないです。そこは知恵を出して、外向きにアピールしないと、静岡の人だけに分かって駄目です。例えば、東京の人とか、関西の人とか、もう少し言えば、外国人がここへ来たときに、一体何が面白いのか、何を魅力に感じるかをもっと考えないと、これから国際化していくと、外国人がどうやったら来るかというところの受け皿がないと、これは絶対に成功しません。

もう 1 つだけついでに言いますと、先ほどのご意見の中で、博物館のところでおっしゃった中で、企画展という話がありました。企画展は、当たれば確かに集客力は大きいと思います。でも、外れたら本当にみじめなものです。静岡で企画展をして、いつもミロのビーナスを持ってこられればいいけれども、地元の歴史の話も、一方ではやらないといけません。徳川家康公や、徳川慶喜の話は、毎年はできないわけです。そうすると、特別展をやるときは来るけれども、駄目なときは来ません。それは、博物館経営で非常にしんどい部分です。

だから、僕は、常設展でどうやって集客できるかをもっと考えないといけないと思います。これは次回の課題になるかもしれませんが、常設展とビジターセンターとの連携みたいなものを、もっと考えていかないといけないです。

なぜ、そんなことを言うかと言いますと、博物館に行く日本人は土日しか行かないので



す。平日には行きません。うちも大体そういう傾向がありました。そうすると、ある議員がやって来て、「閑古鳥が鳴いている」と言うわけです。平日の朝の 11 時ごろは、博物館には誰もいません。昔、梅棹忠夫先生が「博物館は高速道路と一緒にだ。混んでいたらあかんやろう」ということで、博物館高速道路論をおっしゃいました。それは梅棹さん一流の言い方で、博物館にたくさん人が来てくれるのはいいに決まっているわけです。けど、平日の昼間は閑散たるところが多いです。特に歴史博物館はそうです。

そこは、誰をターゲットにすればいいかという、外国人です。外国人は、日本に来たら土日はありません。むしろ平日にうろうろするわけです。ところが、企画展は、外国人のイメージ中ではないのです。つまり、限定的な展覧会だから、たまたま来た人はいいいけれども、それを目指して来る外国人はいいません。そうすると、常設展に来るわけです。

ヨーロッパの博物館は、大体常設展で勝負しています。そのイメージで彼らは来ますから、例えば大関ヶ原展を見に行っても、これは日本の歴史ですから、なかなか分かりません。5 カ国語対応もしていたらいいですけども、していても、例えば、外国の絵画展を日本に来てわざわざ見る外国人はいないと思います。

そうすると、常設展をどうやって魅力的なものにするかというところで、これは教育的な観点も大事なのですけれども、外国人が見たときに、文化比較とか、そういうもので魅力的に映るような仕掛けが必要です。

そういうものが魅力的にできると、たぶんロビーや、ここで言っている集客のビジターセンターに絶対ににじみ出てきます。そういうことを考えられたらどうかなと思います。

だから、この議論が十分にできないと、博物館の側の展示も面白くなくなってきました。要するに、ありきたりになってしまいます。皆さん、ご覧になっているとおり、どこの博物館へ行っても、大体金太郎あめみたいな常設展なのです。それではもう駄目です。そのところの工夫をすると、たぶんビジターセンターのほうにそれがにじみ出てきます。相互作用が出てくると思います。

○杉澤：外国人の話が出ましたけれども、今、静岡空港でも中国便がもう既に入ってきていますが、その方たちが静岡で何をやっているかという、お茶摘みの体験や、お茶室の体験です。

形だけやって、それこそ着物、お茶。お茶の先生とかがなんとか流というので立てて、こうやっていくのです。それが今、事実上、静岡でパンク状態というぐらい、お客さまが

行っているのは事実です。

ただ、そこを旅行会社として捉えると、そこで、外国の旅行者がここに来て何かメリットを感じるかですが、旅行会社は、商売としてやっているものですから言わないです。そういうものも合わせて、インバウンドで考えると、静岡に来ていただくということは、全国の視点が大事なので、静岡は何が魅力か、その掘り下げが特に重要だと思います。

○谷：ここに書いてあるのは、べつに東京でもできるという意味であって、それだけでは弱いです。ここが何なのかというのは、逆に静岡の方が真剣にやらないと、そこから今、考えなければいけないかもしれない。なかなか難しいです。

○杉山：静岡の人が静岡のことをもう 1 回知りたいと思うことは何でしょうと今、思ったのです。あいまいです。なんとなく分かっている気になってしまって、今川、家康とか、なんとなく分かっていると思っています。

私の体験から言わせてもらおうと、徳川慶喜展を静岡市美術館でやったのですが、全く反応が悪いです。だから、地元で浮月があって、慶喜さんがいてと言っても、訴求できるものがないというのが、気質にあるのかなと思うので、そこを、君も静岡のことを思ってみようと思わせるのは何だろうと思うのです。

○谷：宇治に、源氏物語ミュージアムがあるのです。世界遺産になった平等院の横で、ほっておいても人は来るのですけれども、あれをつくったときに僕はうまいなと思ったのは、『源氏物語』は宇治と違うのです。あれは、本当は京都なのです。だけど宇治十帖があるから、宇治に引っ掛けたわけです。それで平等院の横につくったので、みんなはもう『源氏物語』は宇治が中心だと思っています。先につくられてしまったので、いまや京都には、源氏物語ミュージアムはできないわけです。

全国的なある種の知名度があって、そことどうつながっていくかみたいなのところの外から見た取り組み、そういうのがあると、結局、今はもう『源氏物語』は宇治だみたいな感じになってしまっているのです。そういう発想の転換みたいなものは、いいかもしれせん。

○森田：やはり参加できないと楽しくないと思うのです。ただ、見せられても、「あ、そうなの」で終わってしまう部分があります。徳川慶喜さんは、確かに身近な方にはすごい身近なのですけれど、歴史的にもあまりいい感じではないでしょう。見方がそもそもあって、いまいち誇りきれないみたいな部分があると思うのです。

それこそ京都に外国人がすごくたくさん来る中で喜ばれるのが、日本人の観光客の人た

ちが着物を着せてもらって、そのスタイルでまちなかを歩いていると、「一緒に写真を撮ってください」みたいな感じすごいらしいのです。これは大事な発想です。

例えば、家康公がいた時代に、前のさきがけ博物館事業のときにも、今川展ですかね、幾つかやられていましたけれども、そのスタイルで、ただそこに来ただけではなくて、ちょっと歩けるような街並みがあったり、徳川慶喜さんの時代はもうちょっとファッションを変えていってこうだったのだろうかとか、そんなことがかかわっていきなり、一緒に写真を撮ってもらえたりすると、それだけでも楽しいかなと思います。

また、専門学校とか、若い子たちもいますので、ファッションの勉強をしている子たちもいたりするので、うまくそういう子たちも活用してあげると、参加性があると楽しいかなと思います。歴史の誇る世界自体も、ただ見せられるものだとやはり飽きてしまうので、どれだけかかわっていけるのかという部分をつくってあげるのが重要ではないかと思っています。

ビジターセンターと博物館を基本的に別にしなければならない部分はあると思うのですが、あそここの場所がビジターセンターで静岡の入り口となるのは、いろいろな面でかなり無理があります。歴史と絡んでの展開でないと、根本的に無理があると思うのです。

建物の配置の問題や、いろいろな問題で、それはしなければいけないとしても、中身としては、例えば常設展で展示してあるこの場所に行きたかったら、このカードを持ってビジターセンターに行ってくださいとか、ちょっと細かい話ですけど、そんなようなつながりが、細かく細かく入っていくということがビジターセンターの魅力にもつながるし、歴史の博物館の魅力にもつながります。全体的なイメージも大事なのですが、意外と、そういう細かいところが大事かもしれないと思いました。

○望月：教育の立場からですが、自分は今川家を、周りの戦国大名たちが非常に憧れた文化を育てたということで、とても誇りに思っているのですが、徳川家康公の場合に、人質の時代から考えると、大体、小中高の年代なのです。その小中高の年代と、ご承知のようになるのですが、意外と小中学生は、例えば、雪斎和尚にいろいろなものを学んだとか、どういう人たちと接して、どういう教えを受けて、どういう遊びや食べものとか、そういう部分に関して割と知らないのです。

ですので、そういうものを地元の子どもたちに知ってほしいと思ったときに、出ているアイデアの中で、自分はこういうのをやってほしいなと思ったのが、静岡市の今川家でも、徳川家でも、そこで育った、例えば家康公でいけば、静岡市で過ごした間の、本当に眠っ

ているエピソードはいっぱいあるのです。そういうものを掘り起こして、そういうものを劇化して子どもたちに見せます。

そういうものは、ただ読むとか、見るというよりも、劇化されたものはとてもインパクトとして残るので、このようにして 260 年以上続く平和な時代をつくった人が、小さいときに育っていったのだ、それが静岡の時代だということを、映像として何か残して見せられるといいなという感じを持ちました。

○今村：今のなかで 2 つ、課題と捉えることというのがあって、振り返って日本と一緒に中で外国人が来る問題とか、日本の中での静岡の強みみたいなことを、この博物館が出さないといけないということです。

それと、地域とのつながりの中でビジターセンターをつくっていくという話、この 2 つのベクトルを、どうにかたちで擦り合わせをしていくのか、考えないといけないと、私は意見を伺いながら感じました。

○櫻井：この前の今川展のときに面白いと思ったのは、“i f (イフ)” を考えようということで、皆さんに、もしこうだったらどうなっていたでしょうみたいな紙を渡して、それを書いて、展示してあったりしたのです。そうすると、自分の書いたものや、ほかの人たちはどう考えたのだろうかということで、また見に来ると思うのです。そういう企画も面白かったなと思っています。

それと同時に、花倉ですか、ああいうところにツアーを企画して一緒に行きませんかという話があったので、ビジターセンターの中であちらこちらを巡るようなツアーを、来た人たちに提示して、一緒に行ってもらうような、そういう受付もビジターセンターの中でやるのもいいのではないかと思います。

○松川：ビジターセンターで静岡ならではのことをできれば、全てつながってくると思うのです。例えば、プラモデルのタミヤだって、たどっていけば今川文化になりますし、こういう静岡の誰もがという部分を押さえていけば、そこから必ず歴史文化につなげることはできると思います。

ビジターセンターについても、「静岡の」だとか、「静岡の特色」みたいなもので押さえていくことを考えていったらいいのではないかと思います。

○委員長：これまで出されましたご意見をいろいろ聞かせていただいておりますと、事務局としても幾つか詰めていただかないといけない点があったと思います。まずは、ビジターセンターを設置する数字、その他の問題なのですが、ターゲットです。何を対象にしてこ

の数字を算出しているかについて、さらに詳細な説明が必要だろうと思います。特に、外国人をどういうふうに捉えているかという問題です。このへんがある程度明確にならないと、センターそのものの性格、ありようがあいまいなものになってしまうのではないかと、というのが第 1 点です。

それからもう 1 つは、博物館本体との関連をどういうふうに理解していったらいいのかです。お店をいっぱい開いて、買い物に来る人がいっぱい来ましたということでは、意味がないです。特に、売れるものをつくろうなどということをやっていると、一生懸命頑張っている中心街の商店の人たちの営業を圧迫することになりますから、民業圧迫というイメージは絶対持つてはいけないと思うのです。

そうしますと、ビジターセンターのビジットは、やってくる、訪れるという意味であって、それをあちらこちらに行っていただくことによって、より多くの購買力を市内に分散させることにもつながるのだらうと思います。ここに集まりさえすればいいという発想ではなくて、ここからどういうふうに各地に散っていただくかという発想もぜひ加えたかたちで考えていくことが必要だろうと思います。

もう 1 つは、これは次回以降の非常に重要な問題になると思うのですが、静岡ならではの魅力をはっきりさせるための展示、構成は、一体どういうふうになっていくのでしょうか。3 つの大きなテーマが掲げられているわけですがけれども、その内容をさらに深めて行くという意味でも、より魅力的な展示のアイデアをさらに加えていかないと、本体そのものがかすんで、本末転倒になってしまう心配もあります。

このへんは、きょう出てきましたご意見でいろいろ感じたところでもありますので、次回の委員会においては、今のような視点で、さらに資料をまとめていただけたらと思います。ビジターセンターにつきましては、非常にいろいろなご意見が出ましたので、そのへんはうまく整理をしていただいて、次回の委員会で、こんなことになっていましたということでご提示いただけると、次のステップに進みやすくなるのではないかと思います。

○谷：1 つだけ、要望です。これは駿府城の横ですよ。

そうすると、敷地面積はどれぐらいを考えておられるのですか。それから、延べ面積を考えたときに、下手をすると高層化とかの話になってくるのかどうか、景観の問題とかもだぶん出てくると思うので、そのへんはどう考えておられるのか、今でなくても結構ですので、答えていただければと思います。

○委員長：この件につきましては、よろしいですか。それでは、予定どおりになりました

ので、今回はここまでということで、事務局にお返しをいたしますので、よろしくお願  
い  
します。

(7) 担当職員紹介（自己紹介）

(8) 閉会

○局長：木村でございます。今日はさまざまなご意見、ありがとうございました。私も、  
仕事柄いろいろな委員会に出席させていただいているのですが、これほど活発に皆さんが  
意見を述べていただいた委員会は、多分今日委員になっていらっしゃる方も感じておると  
思うのですが、事務局、われわれの人選が間違っていなかった、これは素晴らしい博物館  
ができる、確信をしたところでございます。

冒頭、市長が言いかけたのですが、この 4 月から組織が変わりまして、これまで経済局  
にありました観光交流部門と、生活文化部門にありました、いわゆる文化スポーツ、それ  
を 1 つにして観光交流文化局となりました。何か静岡県の組織と似てきたわけですが、3  
次総のエッセンスは、いわゆる歴史文化も、伝統文化も、食文化も、芸術も、スポーツ文  
化も、皆さんの知恵で新たな価値を加えて経済の活性化につなげようということござい  
ます。

待望久しくわくわく感を皆さんが持っていたらということで、3 次総の重点プロ  
ジェクトの中で、この歴史文化施設の整備をするということで決定しております。後発と  
いうことで、逆にいいとこ取りができるのではないかと考えております。

本当に短いスケジュールの中で、今年は徳川四百年という記念事業の結実でもあります  
し、3 次総でうたっております歴史文化のまちづくりのキックオフというかたちで、市と  
しても一生懸命進めてまいりたいと思います。委員の皆さんには、今後とも忌憚のないご  
意見をいただきまして、一緒にいいものをつくっていきたいと考えております。よろしく  
お願いいたします。

本日は誠にありがとうございました。

(終了)